

はじめに

ゼネラルマネージャー 武田若菜
(行政政策学類 4 年)

東日本大震災から 8 年が経過した今年度も、たくさんの方の支えで活動することができましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

浪江町、富岡町、飯館村の「帰還困難区域」を除いた地域及び川俣町の山木屋地区の避難指示が、2017 年 3 月 31 日および 4 月 1 日に解除されたことを受け、自宅に戻る人々、復興公営住宅に住み替えた人々、仮設住宅に残る人、と多岐にわたるライフスタイルが確立し、「多様なニーズ対応」が存在する新たなステージに進出しました。特に、仮設住宅から復興公営住宅や新しい住宅への移り替えが顕著に進んだことを受け、住民同士の交友関係のつなぎ役になることや、地元住民との調和を目的とした活動の提案を中心に、「連続」的に地味に強くおこなってきた活動をより一層大切に紡いできました。

これまで基盤となっていた復興公営住宅・仮設住宅住居者の生活支援活動及びコミュニティづくりにおいて、「福茶サロン」と称した活動のバリエーションに展開を持たせ、活動を継続してきました。また、入居が本格化した復興公営住宅においては、他団体との連携を軸にしたものから、独自主催のサロン活動、季節の活動、学習支援等の展開が活発化したように思います。復興公営住宅におけるコミュニティづくりや活性化の仲介をする役割を果たせたのではないかと思います。これらは、もちろん来年度もさらに力を入れていきます。一方で、仮設住宅の大部分は、2018 年 3 月末で閉鎖、集約され、災害ボランティアセンターの活動の軸でもあった「いるだけ支援」を実施してきた 2 カ所の仮設住宅も集約となり、いるだけ支援としても一区切りとなります。ですが、これまでできた住民の方との繋がりを絶やすことなく、連続的な活動も見られました。飯館村や浪江町での交流会や健康体操などもおこない、故郷に戻り住まわれている方との交流も図ることができました。引き続き、各地域や集約先の仮設住宅に居住される方々への見守りも継続していきます。

この他にも本当に様々な活動を幅広く展開してきました。この 8 年で私たちは、ニーズの変化に応じた活動を行ってきましたが、その根底にあるものは変わることはありません。活動の向こう側を忘れず、この活動は何の為にあるのか、どんな想いがあるのか、常に脳裏に浮かべながら活動を行っていく必要があると感じています。

東日本大震災が復興に向かっていく中で、時間の経過によって必然的に、当時の様子や現在の様子など、記憶や意識は薄れていきます。その中で、より多くの人たちに、変わりゆく福島「今」を、自分で見て、感じて、そして自分の言葉で伝えられるようになってほしいという願いがあります。そして、2018 年 9 月 6 日には北海道胆振地方東部を震源として「平成 30 年北海道胆振東部地震」も発生しました。さらに、政府の地震調査委員会の公表でも、東北沖から関東沖にかけての日本海沿いで起きる地震の発生予測として、今後 30 年間の間

にマグニチュード7～7.5の大地震が起こる確率は、福島県沖で「50%程度」という数値が出ています。いつどこで災害に見舞われるかわからない状況というのは、ずっと変わることはありません。

東日本大震災を経験したからわたしたちだからこそ抱いている教訓は、これからも生かし、そして発信し続けなければならないと感じています。そして今後も、私たちの活動の背景や本質を忘れず、変わりゆくニーズに柔軟に、学生だからこそできることを続けていきたいと思います。

最後になりますが、私たちと一緒に活動、または私たちに対しご支援を頂きました各大学大学生、大学関係者の皆様、各種団体様、活動の広報をあらゆる面でくださったメディアの皆様、災ボラの活動協力に加え、報告書作成にあたりご協力いただきました皆様、この場をお借りして、心から御礼申し上げます。

来年度もこれまでと変わらず、一人ひとりに寄り添った活動を展開していきたいと思えます。今後とも、(学生団体)災害ボランティアセンターをよろしくお願い致します。

はじめに

1. 福島大学災害ボランティアセンターの各事業

① 津波・地震被災地での復興支援活動

1-1. 南相馬市ボランティア活動センターを通じたニーズ対応活動

② 避難指示解除地域での生活復興支援活動およびコミュニティづくり

2-1. 南相馬市小高区児童・生徒の長期休み期間のニーズ対応活動

＊小高フリースペース(夏休み・冬休み)

2-2. 浪江町、飯館村でのボランティアの検討と提案

＊浪江町帰還者の健康づくりや生活支援や町の賑わいづくりの検討

＊飯館村の子ども交流、世代間交流等、仮設住宅等で知り合った人たちを訪問し交流する「顔見知りサロン」の検討実施

2-3. 大熊町、双葉町、富岡村・楡葉町での実況見分

③ 復興公営住宅・仮設住宅(みなし仮設含む)居住者の生活支援活動およびコミュニティ作り

3-1. 居住者がいなくなった仮設住宅での訪問活動「お散歩隊」(前井戸端訪問)の効果的訪問

3-2. 交流スペースを使った住民交流・コミュニケーション支援活動

＊手作業や足湯などを活用したミニサロン…「福茶会」

＊学生サークルや県外支援者等をつなげたレクリエーション

例) 福大のジャグリングサークル等の活用

3-3. 住民との季節親睦活動

＊花見 ＊新緑会 ＊夏祭り・夕涼み会 ＊芋煮

＊バーベキュー ＊クリスマス会 ＊望年会・新年会 ＊餅つきなど

3-4. エクササイズプログラム「JOYBEAT」を活用した体と頭の健康体操の実施

3-5. 各地避難者自治会と地元自治会・地元組織との交流促進活動への協力

例) 飯坂復興公営住宅居住者と地元との交流イベント

3-6. 他大学・団体活動の現地調整活動

④ 仮設住宅拠点化生活支援活動

4-1. 「いるだけ支援」の最後までの実施

⑤ 帰還地域でのむらづくり活動

5-1. 田村市都路地区の人交流事業(「学生 DASH 村」の実施)

⑥ 健康づくり活動

6-1. 高齢者サポート拠点での健康づくり・介護予防サポート活動

＊飯館村「あづまっぺ」での交流サロン(年4回)

⑦ 福島の風評被害軽減・産業振興サポート活動

7-1. 県外での物販、福島発信活動

例) 群馬県「まえばし×ふくしま部」との協働活動

⑧ 次世代育成学びのサポート活動

8-1. 大分県佐伯鶴城高校の研修旅行受け入れ

8-2. 松陵中学校の足湯研修受け入れ

8-3. 東北高校交流会

8-4. 飯館中学校足湯講習会

8-2. 小中学校からの講座等の要請対応

⑨ 福島の子どもたちの健全な交友づくりサポート活動

9-1. 「第6回集まれ！ふくしま子ども大使」

⑩ 福島元気発信活動

10-1. 福島を伝える展示やパフォーマンス

⑪ 子どもの発達・遊び支援

11-1. 桑折駅前復興公営住宅育成会でのミニフリースペースおよびレクリエーション

11-2. 石倉復興公営住宅の「ビーンズ福島」での学習支援およびレクリエーションの協力

11-3. 浪江支援活動

11-3. 各種要請対応

⑫ 子どもの力支援

12-1. 「第6回ふくしまネイチャリングキャンプ」

⑬ 災害に関する他団体・企業との共同活動

13-1. 「アサヒホールディングス」のサロン活動

13-2. 「味の素」との料理教室

⑭ 災害に関する各種調査活動への協力

⑮ 災害援助およびその活動に関する情報提供、啓発活動、報告活動

15-1. 各種研修会・講演会での発表

⑯ 災害復興のイベント企画または協力

16-1. 日本大好きプロジェクトの和紙キャンドルイベント

⑰ 福島大学が行う災害に関する各事業への協力

⑱ その他被災地・被災者のニーズに対応した活動や、センタースタッフ、登録者からの自発的提唱活動

⑲ 大学内外のボランティア登録者の呼びかけと登録者のフォローアップ

19-1. サークルオリエンテーションへの参加および新歓オリテの実施

19-2. 新登録者向けの「災ボラステップアップツアー」の実施(亮太くん)

19-3. ボランティアウィークの開催(あべま)

19-4. ボランティア保険申請の取次、とりまとめ

⑳ 広報活動

20-1. ホームページの運営管理

20-2. Facebook、Twitter、インスタグラムを活用した情報発信

20-3. 学内災ボラ掲示コーナーの充実

20-4. 報告書・活動記録 DVD の作成

2. これまでの活動一覧

3. 寄付金一覧

おわりに

1. 福島大学災害ボランティアセンターの各事業

③ 復興公営住宅・仮設住宅(みなし仮設含む)居住者の生活支援活動およびコミュニティ作り

3-2. 福茶サロン

【概要】

震災以降継続して行ってきた足湯活動に加え、折り紙や昔遊びなど住民の方楽しんでもらえるようなサロン活動を前年度に引き続き行った。活動場所としては復興公営住宅がメインではあったが、仮設住宅にも訪問を行った。

仮設住宅の閉鎖に伴い、やはり今後も活動場所は復興公営住宅等が中心になると考えられる。仮設住宅で築いてきた住民の方々のつながりを生かし、さらに多くの場所でサロン活動を行っていききたい。

【協力】

浪江町社会福祉協議会、特定非営利活動法人「みんぷく」

【活動日時・活動場所・活動人数】

4月22日：旧松川小仮設住宅：11名
5月19日：北沢又第二団地：12名
5月19日：北沢又団地：7名
5月26日：吹上団地：7名
5月27日：旧松川小仮設住宅：7名
6月2日：北中央団地：5名
6月10日：旧松川小仮設住宅：6名
6月23日：北沢又団地：8名
6月23日：北沢又第二団地：6名
7月7日：北中央団地：7名
7月14日：吹上団地：6名
7月15日：北沢又第二団地：5名
7月21日：北沢又団地：4名
7月22日：旧松川小仮設住宅：3名
7月28日：飯坂団地：4名
8月4日：北中央団地：2名
8月21日：旧飯野小仮設住宅：3名
8月25日：旧松川小仮設住宅：3名
9月5日：吹上団地：6名

9月5日：北沢又団地：5名
9月5日：北中央団地：4名
9月23日：旧松川小仮設住宅：7名（うち5名卒業生）
9月29日：北沢又第二団地：4名
9月30日：北沢又団地：5名
10月6日：北中央団地：3名
10月8日：北沢又第二団地：3名
10月20日：飯坂団地：3名
11月3日：北沢又団地：3名
12月23日：北中央団地：5名
2月16日：飯坂団地：3名（明大3名）
2月23日：北中央団地：4名（明大4名）
2月24日：北沢又団地：3名
2月24日：北沢又第二団地：4名
3月2日：北沢又団地：5名（明大4名）
3月9日：飯坂団地：3名
3月9日：北沢又第二団地：5名（明大4名）
3月30日：北中央団地：4名

【参加者の声】

○本郷う野（行政政策学類3年）

平成30年度は福茶サロンを通して新たに多くの住民の皆さんとお知り合いになることができたと思います。月に一度という少ない機会ではありますが皆さんと継続して顔をあわせることで、少しずつ名前と顔をお互いに覚えていくことができました。また、学生の企画したゲームや工作などのレクリエーションに住民の方々と取り組む中で、共有できる思い出をたくさん作れたように感じます。これからもさらに住民の方々と一対一の深い関係を結べるように継続して活動に参加したいと思います。

【活動写真】



3-3. 住民との季節親睦活動

【概要】

福島大学災害ボランティアセンターでは、季節の変化を感じ取れるような四季折々の活動を仮設住宅や復興公営住宅で行ってきた。このような季節の活動には参加する住民の人数も多く、普段なかなか顔を合わせることでできない住民同士の交流の場として機能している。

【内容】

春季 お花見

夏季 夏祭り、BBQ

秋季 芋煮会

冬季 クリスマス会、望年会、新年会

【活動日時・活動場所・活動人数・活動内容】

4月14日(土)：吹上団地：5名：お花見会

6月3日(日)：北沢又団地：5名：BBQ

7月28日(土)：壁沢団地：3名：夏祭り(わたあめ)

7月29日(日)：旧松小仮設：5名：納涼BBQ(かき氷、ビンゴ大会)

8月4日(土)：グリーンパーク都路：8名：灯まつり運営ボランティア

8月5日(日)：グリーンパーク都路：1名：上記に同じ

8月5日(日)：吹上団地：3名：納涼祭(BBQ)

8月18日(土)：北沢又団地(一般社団法人 手作りマルシェ、自治会、町会連合会)：7名：納涼夏祭り&盆踊り大会(浪江焼そば、フランクフルト、焼き鳥)

8月26日(日)：桑折駅前団地(ビーンズふくしま)：5名：子ども夏祭り(BBQ、ビンゴ大会、スイカ割り、種とばし大会)

9月5日(水)：松川第一・松二仮設住宅(あずまっぺ)：6名：夏祭り&東北高校合同交流会(そうめん、かき氷、わたあめ、スイカ割り)

10月6日(土)：守山駅西団地：5名：芋煮会

10月13日(土)：北沢又地域：6名：芋煮会(浪江焼そば)

10月13日(土)：根柄山団地(みんぷく)：4名：芋煮会

10月14日(日)：米沢芋煮会：4名：芋煮会

10月20日(土)：おだかぶらっとほ一む：3名：浪江と小高のこどもまつり

10月21日(日)：石倉団地：7名：芋煮会

11月3日(土)：富岡町さくらサロン：4名：芋煮会

11月3日(土)：北沢又団地：3名：芋煮会

11月14日(水)：松川第一・第二仮設住宅：8名：芋煮会(ちらし寿司、ビンゴ大会)

11月17日(土)：北沢又第二団地：7名：芋煮会(おにぎり)
11月23日(金)：北中央団地：11名：芋煮会
11月25日(日)：桑折駅前団地：7名：こどもの時間 芋煮会
12月1日(土)：米沢クリスマス会：5名
12月9日(日)：若宮団地：2名：クリスマス会
12月15日(土)：守山団地：4名：クリスマス会
12月22日(土)：北沢又第二団地：8名：望年会(焼きそば、フランクフルト、おしるこ)
12月22日(土)：北沢又団地：3名：クリスマス会(そばがき、足湯)
12月23日(日)：桑折駅前団地(ビーンズふくしま)：4名：クリスマス会
1月9日(水)：松川第一・第二仮設住宅：5名：新年会(もちつき、団子さし)
1月13日(日)：飯坂団地：5名：新年会(もちつき)
1月13日(日)：桑折駅前団地：4名：子供の時間(もちつき)
1月19日(土)：守山駅西団地：3名：新年会
1月19日(土)：北沢又団地(みんぷく)：7名：もちつき会(ビンゴ大会、じゃんけん大会)
1月20日(日)：吹上団地：6名：新年会(カラオケ、おもち)
1月22日(火)：飯野明治小仮設：2名：新年会
1月27日(日)：北沢又第二団地：5名：節分(恵方巻、豚汁、ゲーム)
2月6日(月)：富岡町さくらサロン：3名：太巻きづくり
2月10日(日)：飯館村ふれ愛館：4名：こども祭り(綿あめ、ポップコーンなど)
2月10日(日)：桑折駅前団地：5名：節分(ボッチャ、鬼お面づくり)
3月24日(日)：桑折駅前団地：2名：女の子節句の会

【参加者の声】

○三浦 大輔(経済経営学類1年)

僕は石倉団地での芋煮会に参加しました。初めての石倉団地での活動ということでとても緊張していましたが、住民の方々がとても温かく、楽しく活動することができました。カラオケ大会や集まって食事をしましたが、こうした交流の場を持つことが地域の結束力や活力を高めているということを実際に感じる事ができました。それぞれの地域ごとに感じるものは違うと思うので、いろいろな地域での活動に継続的に参加していきたいと考えています。

【活動写真】



3-4. 健康体操

【概要】

2014年より株式会社エクシングにご協力いただいて、復興公営住宅等にて「JOYBEAT」というカラオケ体操プログラムを行っている。

「JOYBEAT」とはテレビに映した映像と流れる音楽に合わせて、椅子に座ったまま体を動かすという内容である。目的は運動不足の解消はもちろん引きこもりの防止や住民同士、住民と学生の交流の場としての役割をもっている。

この活動は住民の方々のサークル活動の一環として定着としている団地もあり、そこに学生がお邪魔しているという形になっていて住民が主体性を持っており、一方的な支援とは違った形がとれている。

【協力】

- ・株式会社エクシング
- ・浪江町役場

【活動期間】

2014年11月29日(土)～現在

【実施場所】

復興公営住宅飯坂団地、浪江町権現堂集会所、復興公営住宅石倉団地、復興公営住宅北中央団地、復興公営住宅吹上団地

【活動日時・活動場所・活動人数】

- 5月12日(土)：飯坂団地：4名
- 5月26日(土)：飯坂団地：4名
- 6月2日(土)：飯坂団地：3名
- 7月28日(土)：飯坂団地：4名
- 9月8日(土)：飯坂団地：2名
- 9月25日(火)：浪江町権現堂集会所：3名
- 11月17日(土)：飯坂団地：3名
- 11月27日(火)：浪江町権現堂集会所：1名
- 12月11日(火)：浪江町権現堂集会所：1名
- 12月13日(木)：石倉団地：2名
- 12月22日(土)：飯坂団地：4名
- 1月10日(木)：石倉団地：1名
- 1月22日(火)：浪江町権現堂集会所：1名

- 1月26日(土)：北中央団地：4名
2月12日(火)：浪江町権現堂集会所：4名
2月14日(木)：石倉団地：3名
2月16日(土)：飯坂団地：4名
2月25日(月)：吹上団地：5名
3月9日(土)：飯坂団地：3名
3月12日(火)：浪江町権現堂集会所：3名
3月14日(木)：石倉団地：1名
3月23日(土)：飯坂団地：4名

【参加者の声】

○竹内 瑛祐（経済経営学類 1年）

健康体操の良さは大きく分けて2つあると思います。1つ目は健康体操プログラム「JOYBEAT」は座ったままできる軽い準備運動のようなレベルのものから立って行う少し激しめの運動まであり、住民の方々も各々の体の状況に合わせて、無理することなく歌を歌いながら楽しく取り組むことができます。2つ目はそれぞれのプログラムの間の小休憩にプログラムの感想や世間話で住民の方々とお話をできることだと思います。このことが今まで健康体操に参加してきて、運動面は勿論ですが大切なメリットだなと感じました。これからも健康体操の良さを生かして、住民の方々と楽しく交流しながら活動を継続させていきたいです。

【活動写真】





④ 仮設住宅拠点化生活支援活動

4-1. 「いるだけ支援」

【概要】

学生が仮設住宅に居住しながら（近所づき合いをしながら、一生活者として簡易な生活支援や声掛けをし、「孤立死・関連死・自殺」をなくすという試み。平成 27 年度復興庁「心の復興」事業に採択。（2015 年 4 月 28 日付）

仮設住宅での状況は避難当時から以下のような変化がみられる。仮設住宅から復興公営住宅やみなし仮設への転居、自力での住宅再建等により、仮設住宅の空室が増加している。若者世代の存在が極端に少なく、仮設住民の高齢化が進んでおり、子ども・若者の声が無く、仮設住宅には寂寥感が蔓延している。実際に、住民の方々が寂しさや仮設住宅の生活感の喪失を感じるという声もある。そんな中、学生が仮設住宅を訪れると、若い人の声が聞こえるだけでも心が和むという住民の話も耳にした。これまで、実際に仮設住宅に住み込み、住民の方々と「時間を共有」する「寄り添い」を実現した新しい生活支援として本事業を展開してきた。

その中で、2018 年 3 月をもって終了する仮設住宅が多く、復興公営住宅への住み替えをする人、自宅を再建する人、避難指示解除に伴いふるさとへ帰る人がさらに増加した。今年度は仮設住宅での生活から新しい生活環境への移行の時期であった。今年度は住み替えによって日々仮設住宅から人が少なくなっていく中で、最後まで住民と「寄り添い」、新しい生活へ送り出すことを中心に本事業を行った。

また、この事業の目的として以下のことが挙げられる。各年代の対話場面や居場所をつなぎ「世代間交流」のわたりをつくる。学生が生活の活力づくりに手を添えることによって、居住者本人が主人公、地域づくりの参画者となれるように住民に働きかける。孤立死を防ぐ。（身体的・精神的・社会的）健康増進に寄与し、介護予防・疾病予防、そして関連死を防ぐ。学生が生活者の 1 人として、仮設住民と日常交流をすることで仮設住宅の静寂観を好転化させる。仮設住民の生活のメリハリづくりを行う。外部との人交流を促進させる。簡易なニーズに応える。

【活動場所・活動期間】

北幹線第一応急仮設住宅：2015 年 6 月 21 日(日)～2018 年 5 月 1 日

安達園同上応急仮設住宅：2016 年 6 月 19 日(日)～2018 年 3 月 31 日

【ロジングスタッフ】

北幹線第一応急住宅

第Ⅰ期：6 月 21 日～9 月 23 日：佐藤俊一、高橋航平

第Ⅱ期：9 月 23 日～12 月 23 日：三浦恒彦、加藤実可子

第Ⅲ期：12 月 23 日～3 月 11 日：鈴木悠平、小島望

第Ⅳ期：3月11日～6月26日：高橋航平（再登板）、佐々木翔太郎

第Ⅴ期：6月27日～10月31日：久保香帆、藤井志穂

第Ⅵ期：11月1日～4月22日：佐々木翔太郎（再登板）、高坂夏美

第Ⅶ期：4月23日～11月11日：高橋航平、坂本奨

第Ⅷ期：11月12日～4月8日：久保野谷雅人、工藤千陽

第Ⅸ期：4月9日～5月1日：辻咲良、工藤千陽

安達運動場応急仮設住宅

第Ⅰ期：6月19日(日)～10月31日(月)：阿部弘輝、狗飼小花

第Ⅱ期：11月1日(火)～3月8日(水)：佐藤しおり、久保野谷雅人

第Ⅲ期：3月9日(木)～9月7日(木)：末永崇

3月9日(木)～11月21日(火)：阿部早也香

第Ⅳ期：9月8日(金)～3月30日(金)：斉藤亮太

11月22日(火)～3月30日(金)：高坂夏美

【イベントの活動日時、内容】

4月5日：あいさつ回り

4月15日：手作りのお菓子を配る

4月19日：引っ越しをされる住民の方に挨拶

4月28日：引っ越し準備

4月29日：引っ越し

5月1日：浪江町に鍵を返還

【ロッキングスタッフの声】

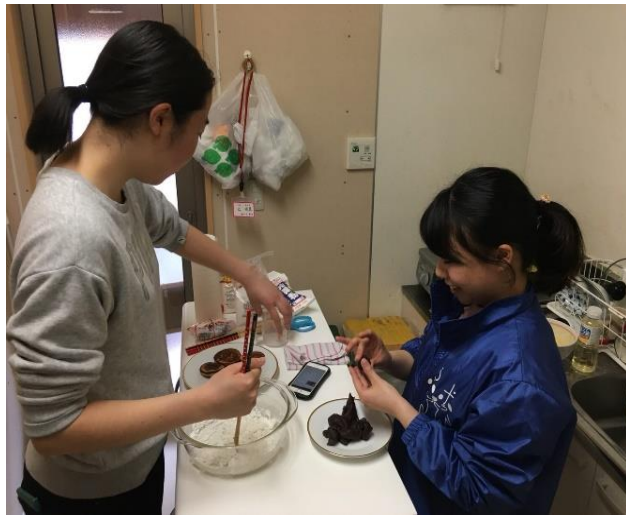
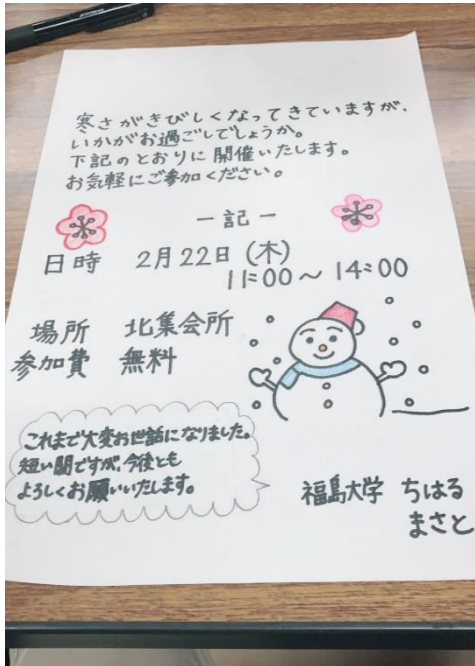
○工藤千陽（行政政策学類3年・第Ⅷ期ロッキングスタッフ）

私がいるだけ支援として仮設住宅で暮らし始めたのは、仮設住宅に住む人が少なくなってきた頃でした。仮設内を散歩していてもあまり人には会わずさみしい感じがありましたが、たまに顔を合わせると挨拶をしたり、立ち話をしたりしていました。仮設住宅で生活してこういう日々の何気ない活動が大切なんだなと感じました。仮設で暮らしてきて新しい環境へ移られる住民の方を最後まで送り出すことができ、貴重な経験ができました。

○辻咲良（人間発達文化学類4年・第Ⅸ期ロッキングスタッフ）

私が担当した期間はほんの少しだけではありませんでしたが、住民の方々とお話を通して住民の方々の温かさに気づき、さらにいるだけ支援という活動は多くの住民の方々に支えられてできた活動であることを実感いたしました。いるだけ支援をはじめ続けてこられた先輩方と私たち福島大学生を受け入れ、支えてくださった住民の方々に深く感謝申し上げます。

【活動写真】



⑤ 帰還地域でのむらづくり活動

5-1. 学生 DASH 村

【概要】

田村市都路地区では、東日本大震災の原発事故の影響を受け、避難を余儀なくされた。その後、平成 26 年(2014 年)4 月に避難指示が解除され、地区への帰還が実現したが、平成 30 年(2018 年)3 月時点では約 80%の帰還率となっている。帰還後は、人口の減少と相まって、地区の高齢化も進んでいる。その中で元気に暮らす高齢者と共に、コミュニティの賑わいだけでも取り戻したいとの声にこたえていくことを目的としている。故郷に戻り、年を重ねた都路地区の人々と「80 になっても夢とロマンを」を掲げて、学生を介したコミュニティづくりを進めている。

【目的】

- ①田村市都路地区の人の賑わいづくりを創出する
 - ・福島大学学生の地域往来
 - ・都路地区外からの人の呼び込み
 - ・むらづくりのための専門家の関与
- ②都路地区の方々との交流を深める
 - ・高齢者と共にした世代間交流
- ③都路地区の方々の主体的な暮らしへの一助
 - ・「80 になっても夢とロマンを」「生きがいつくり」
- ④都路地区をフィールドラーニングの一つに
 - ・学生にとってのフィールドラーニング
 - ・外部の人々にとってのフィールドラーニング(田村市のグリーンツーリズム)

【連携・協力】

- *NPO 法人くらすタ 田村市復興応援隊
- *都路地区の住民の方々

【拠点場所】

活動場所(畑)：田村市都路町岩井沢地区(渡辺仁一さんから借用)←2018年8月末に返還

活動拠点(どんぐりの家)：福島県田村市都路町岩井沢字新田157(渡辺昭男さんから借用)

尚、拠点は住民の土地をお借りした、共同交流スペースという位置づけである。将来的には、学生 DASH 村の契約が終わり貸主にお返しする際に、地域のコミュニティハウス(住民たちが集える場、人と人との輪・住民同士の輪をつなげ広げられる場)としてお返しすることを目標としている。

【活動内容】

4月～5月：紅花栽培(種蒔き、草むしりなど)、紅花染物体験 in 山形(染物のやり方について学ぶ)、トウモロコシの栽培、新メンバーの勧誘

6月～7月：紅花栽培(水やり、草むしり、支柱立てなど)、トウモロコシの栽培、拠点の整備

8月～9月：紅花栽培(紅花の摘み取り、紅餅加工、草むしりなど)、トウモロコシの収穫、都路灯まつりの手伝い、畑の返還(活動内容の大幅な変更)、リーダーの変更

10月～11月：紅花染物体験 in 都路(企画準備～運営)、拠点のリノベーションの本格的な始動(ボイラーの修理など)、都路でのイベント(くっちゃべろう会)への参加

12月～1月：拠点のリノベーション(家の中の掃除、拠点周りの整備)、リーダーの変更

2月～3月：拠点のリノベーション(ペンキ塗り、漆喰塗り)、活動合同報告会 in 都路行政局(福島大学、桜美林大学、青山学院大学、北海学園大学、田村市復興応援隊が参加、発表)、4月に行われる都路四季サロンの準備

【参加者の声】

○豊岡つかさ(行政政策学類3年)

今年度の活動は、活動内容が大きく変わったり(畑⇒拠点のリノベーション)、活動するメンバーが代替わりしたりと、色々と変化に富んだ1年だったと思います。変化に富んだ分、臨機応変に動かなくてはいけない時や、大変な思いをする時もありましたが、その分大きく成長することができました。

今年度の活動の目玉である染物体験in都路では、特別講師として鉄腕DASHにも出演経験のある鈴木美佐子さんが来てくださり、今までの感謝祭とは違うやり方で都路で作った作物を都路に還元することができました。

度々思うことだが、学生DASH村という活動は決して予定通りにいくような活動ではないと思います。しかしだからこそ、それを乗り越えた時、一步成長したと感じ、また、乗り越える度成長していけるものだと思います。これから先もきっと想定外のことが起こるかとは思いますが、住民さんと手を取り合っるとともに乗り越え、より良い活動にしていけたらと思います。

【活動写真】



⑧ 次世代育成学びのサポート活動

8-1. 大分県佐伯鶴城高校の研修旅行受け入れ

【概要】

大分県は、2016年の熊本地震に続いて2017年には九州北部豪雨に見舞われるなど自然災害に直面してきたことで災害・防災に関する関心が高まっている。今回はSSH（スーパーサイエンスハイスクール）研修の一環で大分県立佐伯鶴城高校の高校生が福島県を訪れ、当団体との交流が実現した。東日本大震災について福島大学での様々な学びを通して大分県の高校生に福島の今を感じてもらおうとともに、グループセッションや講話を通して今後の自分達の災害に関する知識・防災への意識を高めてもらえればとの思いから研修内容を構想した。さらに、大学がどのような場であるのかを生徒の皆さんに知ってもらうことで自分の将来について考えてもらうきっかけにしていきたいと考えた。

【目的】

- ・高校生が災害・防災について興味・関心を持つ。
- ・自分ができるボランティアについて考えることができるようにする。
- ・大学生と関わることで将来や進路について考えるきっかけにする。

【連携・協力】

スタ☆ふくプロジェクト(学生団体)

リプラボ(学生団体)

【活動日時】

8月31日(金) 9:00～14:00

【活動人数】

12名

【活動場所】

福島大学附属図書館セミナールーム、福島大学生協等

【活動対象】

大分県立佐伯鶴城高等学校 第2学年生徒 16名

【活動内容】

- ・被災体験学生（南相馬市小高区出身）による震災当時の講話
- ・災害ボランティアセンターや企画協力学生団体の活動紹介

・グループセッション

① あの目を改めて振り返る

《東日本大震災・熊本地震や九州北部豪雨について体験談や当時の様子について共有》

② これからの考える

《今後起こる可能性のある様々な災害とどのように向き合うか、

そのとき自分は何ができるかを短期的視点・長期的視点で考える》

【参加者の声】

○菅野はる菜（人間発達文化学類3年）

高校生の研修の機会を作る活動は、災ボラが発足して昨年に引き続き今回が2度目の取り組みでした。当日は、被災経験学生の講話や当団体をはじめとした各学生団体の活動紹介、さらには高校生と大学生のグループセッション等を通して、充実した時間を過ごすことができました。グループセッションでは、高校生とこれから起こりうる災害とどのように向き合っていくかを考える中で、自分自身も日頃から防災意識を高めて生活していきたいと思いました。

準備段階から少しでも高校生にとって学びの多い時間を作れたらとの思いで試行錯誤しました。その分、当日1つでも多くのことを学び、感じ取ろうとする佐伯鶴城高校の学生さんの真剣なまなざしを見て、改めて企画運営に携われることができ良かったと感じています。

災害の多い日本では、未曾有の天災がまたどこかで起こる可能性があります。次世代に私たちの東日本大震災の経験・そして災ボラの取り組みを語り継いでいくことが、これからの災ボラの使命でもあると感じました。

【活動写真】





8-3. 東北高校交流会

【概要】

次世代育成の一環として、東北高校のボランティア体験を企画した。目的としては①高校生がボランティア活動を体験すること、②高校生が福島について調べてきたことを発信すること、③高校生と住民の方が交流すること、④高校生が福島について学んで次の学習につなげることの4点とした。

【活動場所】

北沢又団地、北中央団地、吹上団地、松川第一・松川第二仮設住宅(あづまっぺ)

【活動日時・活動人数】

9月5日(水)、25名(うち災ボラは6名)

【活動内容】

- ① 高校生と一緒に活動の準備をする。
- ② 宮城の郷土料理である「おくずかけ」を食べながら、高校生・住民の方・大学生が交流する。
- ③ 高校生が事前に福島について調べてきたことをプロジェクト発表する。

【参加者の声】

○高坂夏美(人間発達文化学類3年)

高校生を4つの活動場所にアテンドするというとても貴重な経験でした。一方で、次世代育成の課題として高校生と住民の方をつなぐことの難しさを実感しました。人と人をつなぐ際に、企画や場のづくり方など課題となるところもありました。改善点は次の活動に生かしていきたいです。そして何よりも今回の企画を通じて、高校生がボランティアや福島のことについて興味を持っていただければいいなと思います。

【活動写真】



8-4. 飯舘中学校足湯講習会

【概要】

飯舘中学校が福島大学に訪問した際に、その中のキャンパスツアーとサークル体験会を災ボラとして企画・運営した。目的としては、①中学生に福島大学と(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターについて知ってもらい興味を持ってもらうこと、②中学生と大学生の交流を図ることの2点とした。

【活動場所】

福島大学

【活動日時・活動人数】

9月12日(水): 11名

【活動内容】

10:30~11:00 キャンパスツアー

11:10~12:10 サークル体験として足湯体験会を行う。

【参加者の声】

○高坂夏美(人間発達文化学類3年)

内容としては足湯の体験や、大学生と話せる時間など中学生との交流を中心に企画しました。私にとっては、中学生に福島大学や(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターの楽しさや面白さを伝えるためにどんな企画がいいだろうかと、いつもの活動とはまた違う体験ができました。短い時間でしたが、中学生と交流できて本当に楽しかったです。キャンパスツアーとサークル体験会を通じて、大学生生活やボランティアに興味を持ってくれたらいいなと思います。

⑨福島の子どもたちの健全な交友づくりサポート活動

9-1. 「第6回集まれ!!ふくしま子ども大使」

1 事業目的

私たち、企画団体である福島大学災害ボランティアセンターは学生を中心として、この7年半にわたり、被災地の復興支援、被災者への生活支援、仮設住宅等でのコミュニティづくり等、様々な活動を精一杯行っています。子どもたちに向けても、森の生活を通して子どもたちの力を伸ばすネイチャリングキャンプ活動や、内遊び・外遊びのサポートや夏休みの学習支援など多くのプログラムに取り組んできました。

災害を経験しながらも、元気に前向きに暮らしている子どもたちもたくさんいます。そこで、健全な成長をサポートするために、今年も県内外の子どもたちのふれあいを通しての友達づくりができればと思います。会津で過ごす数日間が互いの子どもたちの“笑顔”のフィールドになり、それぞれが、自分の地域の“大使”として、交友を深めることができればと思います。

2 活動準備経過

- 3月1日 クラウドファンディング準備開始
- 4月3日 1回目のいわき下見
- 4月17日 JTB 東北担当の方と打ち合わせ
- 5月1日 クラウドファンディング開始（当初目標 50 万円）
- 5月9日 第6回集まれ!!ふくしま子ども大使 説明会
- 5月25日 第6回集まれ!!ふくしま子ども大使 学生メンバー確定
- 5月28日 初顔合わせ
- 6月2日 2回目下見
- 6月18日 参加者募集開始（～7月6日）
- 6月29日 クラウドファンディング終了（支援金額 1,069,000 円）
- 7月14日 集い、ウォークラリーリハーサル
- 7月15日 3回目下見
- 7月22日 最終リハーサル、下見
- 7月31日 最終打ち合わせ
- 8月7日 本番（～10日）
- 9月1日 文集、クラウドファンディングのリターン作成開始
- 10月26日 クラウドファンディングのリターン送付
- 2月1日 文集送付

3 実施内容

今回8月7日に第6回集まれ!!ふくしま子ども大使がスタートしました。全国の子どもたちを福島に招待し、いわき市をフィールドに3泊4日間交流しました。いわき市四倉復興公営住宅の住民の方との交流、いわき市内の観光地訪問、そしてキャンプを通した自然体験で健全な成長サポートといったプログラムを行いました。

【活動期間】

2018年8月7日(火)～8月10日(金)

【活動場所】

活動場所：福島県いわき市

宿泊施設：いわき海浜自然の家

【協力・後援】

JTB 東北

【活動人数】

〈学生スタッフ〉

福島大学9名、神奈川工科大学1名

立教大学1名、ノースアジア大学2名 計13名

〈参加者〉

福島15名、関東5名、東北2名 計22名

【内容・行程】

○8月7日 1日目

各地から移動

はじめましての集い（自己紹介、オリエンテーション）

星の観察（雨天のため中止）

○8月8日 2日目

四倉復興公営住宅訪問、住民の方と交流会

スパリゾートハワイアンズ（雨天のため海水浴の予定を変更）

○8月9日 3日目

アクアマリンふくしま観光

ら・ら・ミュウにてバーベキュー

宿泊先で学生企画ウォークラリー（雨天のため場所を三崎公園から変更）

夕食後、キャンドルファイヤー、花火

○8月10日 4日目

さよならの集い（スライドショー上映）

各地へ帰宅、全日程終了

【感想】

《参加者からの作文より》

関東地域 6年生

「今回のキャンプでたくさんの友達ができました。他の県の人たちもみんな優しく、すぐに仲良くなりました。この四日間で友達とのたくさんの思い出を作ることができました。この四日間を通してたくさんの人と仲良くなり、たくさんのことを学びました。このキャンプに行ってよかったなと思いました。」

東北地域 6年生

「印象に残っているのは、四倉団地で災害にあった皆さんにお話を聞いたことです。特に印象に残っているところは私たちから四倉団地の皆さんに質問をして答えてもらうところです。一番今幸せなことなどを聞いたことが印象に残っています。東日本大震災が起きた時はまだ年少でそんなに覚えてないし、当時はそんなに大きな災害だとは知らなくて小学校に入ったら詳しく教えてくれたりして勉強ができたけれど実際に災害にあった方からお話は聞いたことはなかったので改めて学習できて良かったです。」

《他大学生からの感想》

ノースアジア大学 2年 大屋敷 航さん

「初めての大使キャンプで子供達と色々な場所に行き、色々な経験をすることができ、とても楽しい四日間になりました。今回出会った人たちとまた会えることを楽しみにしています。」

《活動を終えて》

・学生リーダー 福島大学 行政政策学類3年 坂本奨

今回の「集まれ！！ふくしま子ども大使」は開催するまでにも、本番中にも様々な困難がありました。

今年度は資金集めから自分たちで行おうということで、クラウドファンディングに挑戦しました。2月から準備をはじめ、5月から資金の募集を開始しました。当初の目標は1ヶ月で50万円の募集でしたが、多くの方々のご協力、ご支援のおかげでそれを大幅に上回る約100万円を達成することができました。この結果には大変驚いたのと同時に、この企画が多くの方々に応援されているのだと改めて感じることができました。

また、この機会に改めて企画趣旨等を見直し、企画内容及び活動場所も変更することとしました。昨年度まで会津裏磐梯地域で行っていたのをいわき市に変更して、浜通りで開催することとしました。準備も例年より早く開始し、下見も例年の倍以上はしたと思います。

本番では台風が直撃し日程のほとんどを急遽変更しました。その影響もあり子供たちにはものすごく負担をかけてしまいました。そこが私の一番の反省点です。ですが、今回の企画が参加してくれた子どもたちにとって少しでもいい思い出になってくれていれば幸いです。

最後にこの場をお借りして、今回の企画にご支援・ご協力していただいた多く皆様にお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

【活動写真】

○1日目 はじめましての集い



○2日目 四倉団地交流会

スパリゾートハワイアンズ観光



○3 日目 アクアマリンふくしま観光

キャンドルファイヤー



○4 日目 集合写真



4 評価・分析

○成果

- ・参加してくれた子どもたちにとって特別な思い出になったのではないかと
→リピーターの子が多いことや作文に来年も参加したいと書いている子が多いことから。
- ・学生と子どもたちのつながりができた。
- ・福島大学の学生と他大学の学生のこれからも続く関係ができた。
- ・準備や本番が学生の成長につながった。

- ・全国の子どもが福島の地で、同年代の子どもと交流することで、福島の現状を感じる事ができた。
 - ・リピーターの多さから、子どもたちだけでなく保護者の方々にも深い信頼と理解を得ていると感じる。
 - ・資金集めの可能性としてクラウドファンディングの道を示せた。
 - ・四倉団地の住民の方との交流という形で、震災のことを子供達に伝えることができた。
- 子供達からの作文でも交流会のことを書いてくれている子が多かった。

○課題

【スケジュールの面】

- ・始動をもっと早めることはできないか。
- 例年よりは早かったが、それでも少し期間が足りなかった。
- ・企画後の反省会などの企画をこれまで設けていなかった。
- やりっぱなしにするのではなく反省会を行うことで来年以降につなげたい。

【企画内容の面】

- ・終始班付きの学生が子供達を引率している感じが強かった。
- 一緒に楽しむという形ではなかった。
- ・子どもへの対応に困ることがあった。
- 事前に前回参加した人の話を聞くなどして学んでから行きたい。
- ・学生企画・集いの物足りなさ。
- 昨年度までとは違う体制で臨んだのもあり、学生一人ひとりにかかる負担が大きくなってしまった。
- ・子供達に負担を多くかけてしまった。
- 宿選び、日程の面で改善が必要。

【金銭管理の面】

- ・資金集めにとりかかるのが遅かった。
- クラウドファンディングにとりかかるのをもう少し早くすべきだった。
- 助成金の申請もできるようにもっと早めにとりかかるべきだった。
- ・もう少し資金を集めるべきだった。
- なるべく自己資金を使わない方向で行きたい。

【広報の面】

- ・子供の募集がなかなか集まらなかった。
- リーダー陣だけでなく、メンバー全員で集めるようにしなくてはいけない。

→SNS 等での広報や小学校へのチラシ郵送だけでは効果が薄かった。直接足を運ぶことが大事。

5 今後の展望

今回の第6回集まれ!!ふくしま子ども大使を含めた過去6回の企画は、①福島の子どもたちの健全な交友づくりをサポートするため、全国の子どもたちと、福島の子どもたちの交流をし、今後も続く関係づくりをする。②福島の良さと楽しさを思いっきり感じてもらう。③全国から参加してもらえる子どもたちもそれぞれの地域の大使として、福島県と交流を深めてもらう。④参加協力大学生とも今後ともに歩む関係をつくる、といった大きく4つの目的を掲げ活動を行った。今年度に関しては、この目的を改めて再確認し、さらに震災の風化防止というの大きな目的として企画を立てた。結果としてこの目的は概ね達成されたと考える。台風の影響もあり当初の計画通りとはいかなかったが、スパリゾートハワイアンズやアクアマリンふくしまの観光を通して子供達同士の交流を深めることができた。さらに、その観光を通して津波の被害からここまで復興してきたということを示せたと考える。また、震災の風化防止として、今年度は復興公営住宅の住民の方との交流会という形の企画を立てた。子供達にはよりわかりやすく、自分に近い感覚で震災のことについて学んでもらえたと思う。さらに、被災された方々が今どのようなことを思いながら生活しているのかということを知ってもらえたと思う。

来年度以降の展望として、より多くの地域の子供達との関係づくりを進めながら、震災の風化防止や防災教育というところにも重点を置いた企画を展開していきたいと考える。様々な災害が発生している現在において、東日本大震災の教訓を学ぶことは非常に大事なことである。さらに、それを他人から話を聞くだけというのではなく、自らの体験、経験として学ぶことにこの「集まれ!!ふくしま子ども大使」の大きな意義がある。子供達の今後の豊かな人生づくりに少しでも寄与できるようにしていきたい。

6 実施体制

今後の実施体制としては、災害ボランティアセンターが全てを主導して行っていくか、NPOなどと連携しながら行っていくか十分に検討しながら実施していきたいと考える。

7 資料

第6回集まれ！！ふくしま子ども大使 募集チラシ

第6回 集まれ!!

ふくしま子ども大使

旅行期間
2018年
8月7日火～10日金 4日間

場所 福島県いわき市

宿泊施設 いわき海浜自然の家

旅行代金 ￥0

対象 全国の子どもたちと
福島県内の子どもたち
小学4年生～小学6年生

プログラム内容 キャンプファイヤー・海水浴・BBQ
アクアマリンふくしま観光
震災のお話・学生企画ウォークラリー など

参加者のご出発地別 募集人員

東北ブロック	5名
関東ブロック	5名
福島県内	10名

※各ブロック毎に当該地から支援大学の大学生が同行します。

私たち企画団体である福島大学災害ボランティアセンターは学生を中心として、この7年半にわたり、被災地の復興支援、被災者への生活支援、仮設住宅でのコミュニティづくり等、様々な活動を精一杯行っています。子供たちに向けても、海外でのリフレッシュキャンプ活動や、内連呼のサポートや夏休みの学習支援など多くのプログラムは取組んでまいりました。ストレスを感じ得る環境の中で、元気に前向きに暮らしている子どもたちもたくさんいます。そこで、健全な成長をサポートするために、県内外の子どもたちのふれあいを通じての友達づくりができればいいと思います。それぞれの個性が、自らの地域の大使として、交流を深めることができればいいと思います。参加ご希望いただけるようであれば、心をこめてお迎えしたいと思います。

（学生団体）福島大学災害ボランティアセンター
電話：080-3142-3262(担当：高坂) HP:<http://fukudai-volunteer-center.jimdo.com/>

お申し込みお問合わせ先
旅行業公正取引協議会 会 員
株式会社 JTB 福島支店 「第6回 集まれ!!ふくしま子ども大使 ツアーデスク」
〒963-8004 福島県郡山市中町10-14 和久屋ビル2階
営業時間：月～金/9:30～17:30(土・日・祝日休業) 総合旅行業観光協会の登録番号 登録 番 **TEL:024-932-0657 FAX:024-933-6620**

旅行業登録番号 024-933-6620 旅行業の旅行代理店として登録された事業者です。この旅行代理店に、福島県から参加されるお申し込みの申込みは、ご希望の申し込みの登録番号に照合してください。

登録番号:1189002

⑫子どもの力支援

12-1. 「第6回ふくしまネイチャリングキャンプ」・ネイチャリングスクール

【概要】

私たち（学生団体）福島大学災害ボランティアセンターでは、2011年度より福島県内の子どもたちを対象としたキャンプを行ってきました。

その目的は、震災・原発事故の影響による様々気持ちに対しリフレッシュすることであり、福島県外で海水浴や観光を楽しんでもらうツアー型キャンプという形をとっていました。しかし、最近では大学生と様々な体験をすることで力強く成長してほしいという保護者の意見も多く聞かれるようになり、また子どもたち自身、自然と触れ合う機会が少なくなっているという調査結果もあります。そこで、震災5年目を迎えた2015年度より、遠方の「ツアー型」から福島県内の「ネイチャリング型」の活動に展開し、被災地の子どもたちが豊かな自然の中でのびのび活動し、かつ主体的に新しいことにチャレンジできるキャンプへシフトしました。

昨年に引き続き4回目のネイチャリングキャンプとなった今年度は、福島県内から小学4～6年生12名、中学1年生1名の計13名が参加し、北塩原村にある「小野川湖レイクショア野外活動センター」でキャンプを開催しました。また12月1日から2日にはネイチャリングスクールを開催しました。

キャンプでは、『体験・挑戦・発見』をコンセプトとし、裏磐梯・小野川湖湖畔を中心とした大自然を活かし、子どもたちが普段はできないような自然体験を盛り込んだプログラムを構成しました。また、今年度は中学1年生も参加対象とし、集団生活の中で役割獲得やリーダーシップを育てていくことをねらいとしました。

【協力】

ホールアース自然学校 福島校

【活動場所】

小野川湖レイクショア野外活動センター
(福島県耶麻郡北塩原村大字桧原字小野川湖畔)

【活動期間】

第6回ネイチャリングキャンプ：8月18日(土)～21日(火)
ネイチャリングスクール：12月1日(土)～12月2日(日)

【活動人数】

第6回ネイチャリングキャンプ
<学生スタッフ>

福島大学 14 名

〈参加者〉

福島県内の小学 4～6 年生、中学 1 年生 13 名

- ・福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫
- ・ホールアース自然学校福島校 和田祐樹さん(自然活動インストラクター)
- ・弓田裕子さん 佐藤美奈子さん (看護師)

ネイチャリングスクール

〈学生スタッフ〉

福島大学 10 名

〈参加者〉

福島県内の小学 6 年生、中学 1 年生 8 名

- ・福島大学行政政策学類教授 鈴木典夫
- ・ホールアース自然学校福島校 和田祐樹さん(自然活動インストラクター)

【活動内容・行程】

第 6 回ネイチャリングキャンプ

■8/18(土)1 日目

結団式

アイスブレイク

食材取りゲーム

■8/19(日)2 日目

カヌー・カヤック体験

料理対決

■8/20(月)3 日目

トレッキング

キャンドル作り

キャンプファイヤー

フリーアクティビティ

解団式

ネイチャリングスクール

■12/1(土)1 日目

結団式

アイスブレイク

夕飯作り

■12/2(日)2日目

フリーアクティビティ

解団式

【保護者アンケートより】

企画実施後、参加者の保護者向けにアンケートを実施しました。その中からいくつか抜粋して紹介します。

Q. お子様を参加させた理由、お子様が参加したいと言った理由をお聞かせください。

A. 小学4年生から参加していたが、本人が今年も行きたいと言ったため。

A. 家に男手がなく、なかなか自然に触れ合う機会がないため。

Q. プログラムはいかがでしたか。またその理由をお聞かせください。

A. みんなと協力したり、自然と触れ合えたりしてよかった。

A. 息子がエピソードを語ってくれる。楽しい思い出になったよう。

Q. キャンプ後お子様の変化などは見られますか。もしありましたらお聞かせください。

A. 楽しかったと満足。自分で料理をしたいと言って何度か料理をした。

A. 少し頼もしくなったような気がする。重いものを持ってくれるなど少したくましくなった。

【参加者の声】

○山口 志織 (経済経営学類3年)

2度目の参加となる今年は、キャンプ長という立場での参加になりました。参加者募集の遅れや情報共有の不足など、多くの反省点を残す運営となってしまいましたが、多くの方々の協力のおかげでひとつのキャンプを作ることができました。

昨年度との大きな違いは、今年度は中学1年生の子どもも参加しているという点です。小学生と中学生がどうしたらうまく仲良くなれるか、他学年同士のつながりをどのように作るか悩みました。一つひとつのプログラムの中で異学年同士がうまくミックスされるよう工夫したり、一人ひとりに役割を与えたりすることで、中学生は年下の子のことを気にかけて小学生は中学生を頼りながら、互いに協力し合い取り組んでいる姿を見られるようになりました。その結果、料理対決やトレッキングなどプログラムの中だけでの協力ではなく、食事や入浴、翌日の着替えの準備など、日常的な活動の中で年下の子を気に掛ける上級生を見られるようになりました。3泊4日のキャンプという集団生活を通して、こういったひとつの成長を発見することができたのは非常に嬉しいことだと感じました。

今回のキャンプを通して、子どもたちだけでなく私自身も多くの物を得ることができたと思います。ぜひこの経験を普段の生活に活かしていけたらと思います。

来年度で 5 年目となるこのふくしま子どもネイチャリングキャンプがより充実し、子どもたちにとってリフレッシュや成長につながり、かけがえのない思い出となるよう、これまで蓄えた経験に加え、今年度得た反省点をしっかり引き継いでいきたいと思っています。

○山田 椋大（行政政策学類 1 年）

私がこのネイチャリングキャンプに参加しようと思ったのは、福島大学に入学して生まれ育った福島の為になる活動がしたいと思い、福島大学災害ボランティアセンターに入ることがきっかけでした。子供たちと活動するのは経験がなく不安ばかりでしたが、最終日には楽しさと子供たちの可愛さで不安はほとんどなくなっていました。プログラム自体も自分自身も経験したことないことばかりで子供たちと一緒に楽しむことができました。

特に印象に残っているのは子供達を連れて滝を見にいったことです。滝を間近で見た迫力と自然の力を感じて子供達の喜ぶ声がとても印象的で忘れられませんでした。人生でもなかなか経験できない感動だったなと思います。

そして、自分の子供かのように可愛い子供達を見て考えたことがあります。こういったネイチャリングキャンプのような活動を行えば子供に対して暴力を振るったり虐待をする人が減るだろうという事です。3泊4日だけの面倒を見る事でさえも大変な事がたくさんありましたが、それ以上に子供達の笑顔や成長を見たり、感じたりして早く親になりたいという思いを持ちました。

心無い事件がニュースで連日取り上げられていますが、ネイチャリングキャンプのような活動が広まっていき、同じような思いを持つことができた人が増えるといいなと思いました。ネイチャリングキャンプは大学 1 年生の 1 年間で 1 番の思い出となる経験でした。

【活動写真】





3. 平成 30 年度 寄付金ご芳名一覧

(2018 年 3 月 31 日現在)

日付	金額 (円)	備考
5 月 1 日	5,000	吹上団地様 寄付金
5 月 1 日	1,000	匿名 寄付金
5 月 11 日	10,000	クシマ ツネトモ様 寄付金
5 月 21 日	19,568	不用品取扱所様 寄付金
6 月 4 日	41,627	NPO 法人 ふれあい広場ポーポーの木様 寄付金
6 月 4 日	5,000	フジタ マサト様 寄付金
6 月 4 日	3,000	ユタ ハルカ様 寄付金
6 月 29 日	100,000	白寿会様 寄付金
6 月 29 日	50,000	ソロプチミスト様 寄付金
8 月 3 日	10,000	モモイ マサヨシ様 寄付金
11 月 27 日	180,000	R ジャパン様 寄付金
11 月 29 日	10,500	前橋芋煮会 寄付金
12 月 7 日	5,000	佐野 小百合様 寄付金
3 月 14 日	2,100	匿名 寄付金
3 月 26 日	8,850	匿名 寄付金
3 月 29 日	48,661	匿名 寄付金

おわりに

ゼネラルマネージャー 坂本奨
(行政政策学類3年)

今年で、「東日本大震災」から丸8年が経過し、9年目を迎えました。2018年は平成最後の年ということで1つの節目の年となりました。一方で多くの自然災害にも見舞われた年ともなりました。1月の草津白根山の噴火から始まり、6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨、9月の台風21号、同じく9月に発生した北海道胆振東部地震。自然災害の恐ろしさを改めて実感したのと同時に、私たちには何ができるのか、何をすべきなのか、私たちの活動の本旨とはなんだったのかということについても改めて考える機会となりました。

まず、今年度の(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターの活動を振り返ってみたいと思います。普段の足湯活動や季節の活動では、昨年度に引き続き被災者の方々の生活拠点が仮設住宅から復興公営住宅や避難指示が解除された地域に移り変わり、私たちの活動もその場所ごとに存在するニーズに対応しようとしてきました。今年度は主な活動場所となった復興公営住宅で、住民さん同士のコミュニティ形成や私たちと住民さんの関係づくりに本格的に取り組んできました。学生DASH村の活動に関しては、昨年度の反省を踏まえながらその活動内容を見直し、田村市復興応援隊の方々と協力しながら、昨年度よりも地域の住民の方々との交流活動に力を入れました。「集まれ!ふくしま子ども大使」では活動場所を変更し、資金集めのためにクラウドファンディングにも挑戦しました。「ふくしま子どもネイチャリングキャンプ」は夏、冬の2回開催をしました。昨年度から始めた「次世代育成若者サポート事業」として、高校生を対象とした活動も昨年度に引き続き実施しました。

今年度はどの活動においても被災された方々のことを考え、思い、活動をしていけたのではないかと思います。そのような姿勢は代々受け継がれてきた災害ボランティアセンターの姿勢でもあります。今年度は特にそれが示せたのではないかと思います。私たちの活動は常に被災された方々に「寄り添う」活動です。私たちの活動に参加して下さる被災者の方々のことを第一に考えた活動を今後も継続していきたいと思います。

次に、今後の(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターについて少し述べさせていただきます。2020年は東日本大震災から10年目の年であり、国の「復興・創成期間」も終了するということが1つの節目の年となります。しかしながら東日本大震災で被災された方々の様々なニーズは未だ存在しています。先ほども述べたように生活の拠点が変わることさらに生まれてくるニーズも多々あります。その様々なニーズに対して私たちは今後も私たちにしかできないこと、私たちだからできることを考え、模索しながら今後も活動をしていきたいと思っています。私たち災害ボランティアセンターの「自死・孤立死を防ぐ」という理念は今まで一度も変わってはいません。今後もこの理念は変わることはありません。この理念を胸に、私たちの活動は誰に向けて何のためにやっているのかということ履

き違えず、決して自己満足の活動にならないように注意しながら今後も常に被災者の方々を第一に考えた活動を継続していきたいと思います。これからも「地道」に「寄り添い」の活動をしていきたいと思います。

最後に、私たちと共に活動、または私たちに対しご支援いただきました各大学学生、大学関係者の皆様、各種団体様、活動の広報をあらゆる面でしてくださったメディアの皆様、災害ボランティアセンターの活動に加え、報告書作成にあたりご協力していただきました皆様、この場をお借りして心から御礼申し上げます。今後とも、(学生団体) 福島大学災害ボランティアセンターをよろしくお願い致します。